

タンチョウの里のダチョウ

阿寒建設協会「阿寒オーストリッチ研究会」



公共事業も年々減少し、建設業をとりまく状況は一段と厳しくなっている。特に北海道の、とりわけ地方へ行けば行くほど町の各方面、特に経済への影響は大きい。道内各地の建設業界でも異業種への参入などいろいろな取り組みが行われているが、その中から、さまざまなメリットから「21世紀の家畜」ともいわれ脚光を浴びているダチョウの飼育を試みている阿寒建設協会の取り組みを見た。

「21世紀の家畜」ダチョウ

'01年秋、阿寒建設協会の安全パトロールの反省会の席で、「今後、わが建設業界はどうなっていくのだろう」ということが話題にのぼった。会員全体での受注額は既に3割減少しており、このままではジリ貧、存亡の危機であることが明白だ。ある会員から、新しい産業分野に手を広げることを検討するべきとの声があがると、またある会員から「いま、オーストリッチ（ダチョウ）が脚光を浴びている」という声があがった。

ダチョウ肉は、鶏肉というより牛肉に近いイメージで、くせがなく、低脂肪低カロリー、高タンパク、鉄分やミネラルも豊富であり、そのヘルシーさが近年注目されている。基本的に草食なので、輸入穀物に頼りがちな他の

家畜よりも飼料の安全性も確保しやすく、低コストで、食料自給率の低い日本にとっては深い意義がある。

また、牛革の3倍の耐久性ともいわれるオーストリッチ皮革はハンドバッグなどの素材として有名だ。左右対称の美しい羽根も、ファッションの世界でも重宝がられるほか、静電気を出さず傷をつけにくいので、OA用ダスターや大手コンビニエンスストアの陳列棚用ダスターなどにも広く用いられている。このほか脂や卵の殻に至るまで、利用価値は極めて多様である。

大きな鳴き声も臭いもあまり出さず、牛の10倍ともいわれる栄養摂取効率で、わずか1年で100倍もの体重に成長する生産効率の高さもあり、「21世紀の家畜」として注目されている。

農水省などの調査によると、平成14年度で北海道から沖縄まで全国で1万羽、北海道内では48事業所で1,279羽が飼育されている。趣味や観光目的での飼育も多いが、近年は生産目的も増えてきており、JR北海道などでも事業化している。

真冬でも元気なダチョウを見て決意

'02年2月、阿寒建設協会の視察団一行は、東藻琴村にある農業生産法人「オーステック



飼育舎内のダチョウ



経営資源を活用した飼育施設制作

「オーステックジャパン」を訪れた。'95年からダチョウ育成事業に取り組んでいる、全国でも先駆的な存在だ。ここもまた、旅館経営者、ケーキ屋さん、農業など異業種の人々が集まり始まった団体である。数日前に冬嵐があった直後のことで、農場の屋根も吹き飛ばされたりしている中、そこにダチョウたちが威風堂々と立っていた。真冬の道東でもまったく平然としているその姿に驚いた菊池賢代表は「ああ、これはいけるんじゃないか」と、ダチョウに取り組むことを決意した。

視察や情報収集を重ね、'02年3月、建設協会会員9社と、役場を退職したたいへん動物好きの有志町民（現在農場長を務める）で、「阿寒オーストリッチ研究会」を設立した。会員の所有する土地を無償で借り、飼育舎やパドックの造成・建設には本業の経営資源を有効活用し、通常の4分の1程度の費用で設備が完成。オーステックジャパンから生後8ヶ月のダチョウ16羽を迎え入れ、飼育が始まった。

商品化と販路の開拓が課題

ダチョウの種類は、家畜用改良種である「アフリカン・ブラック」という種。事務局長の大西博行氏によれば「この種は性格がおとなしくて非常に扱いやすく、原産種はかなり扱いづらい性格」だそうだ。

飼料は基本的にはダチョウ専用の飼料を使用するが、地元の農家が積極的に規格外野菜や屑野菜などで支援する。

今年1月、最初の16羽から繁殖用の3羽を残し、13羽を「初出荷」した。日本オーストリッチ事業協同組合の指定と畜場は国内では山形県と岐阜県の2ヶ所しかなく、阿寒からは山形のと畜場に出荷する。なにしろ1羽あ

たり百数十kgにもなる大きな鳥なので、輸送コストは大きな負担となる。長時間トラックに揺られるダチョウたちにとってもストレスであるし、輸送中に羽根もけっこう痛む。さらに、製品を地元に戻元するには山形から阿寒に送り返すために往復となる。出荷から先の領域で地元の名産品として盛り上げるにはと畜を近場で、できるなら自分たちで行いたいところである。現在、オーステックジャパンなどとの間で、孵化やと畜について分業制でできないかと協議している。

出荷した肉については、山形のと畜場から「肉質はたいへん優れている」と高い評価を受けた。「ひとつには阿寒の優れた自然環境もあるんでしょうけれど、地元の農家の皆さんからの新鮮な野菜の提供を受けたことも大きいんでしょね」と菊池代表は地域からの応援の効果を確認する。

孵化施設などを追加した飼育施設は当初計画の95%ほど完成した。最大で200羽ほどの収容能力があるとされているが、目下のところ専任は農場長一人で飼育している。まだ研究会の段階なので、雇用や収入には結びついていないが、今後はこの場所での拡張や他の場所での展開も視野に入れ、来年をめどに法人化の準備をすすめている。また、農業者など外部から、遊休施設の活用などの話ができれば受け入れたいとしている。

保健所の食肉検査に合格し、阿寒に戻ってきた肉を使い、2月に地元の人たちを招いて試食会を開いた。町内の温泉宿泊施設「赤いベレー」の料理長の協力を得て、刺身、香草焼、カルパッチョ、ロースステーキなど7品目の料理を提供。参加者からたいへん好評を得て、アンケートでも59人中52人が「また



今年2月の試食会の様子



パドックのダチョウ

「食べてみたい」と答えた。

後背には釧路よりも知名度が高いともいわれる阿寒湖温泉という一級の滞在型観光地を控える。いかに地場の特産品として、また観光資源としてもダチョウを関連づけられるか。そのためにも、と畜まで含めて一貫した生産と商品開発が今後の課題となっている。

また、阿寒は「丹頂の里」としても有名である。タンチョウとダチョウ、どことなく共通点がないわけでもないこの鳥たち、片や絶滅の危機から救おうと大切にされつつ、その一方で繁殖して食用にすることによって町内から抵抗はないかと気になるところだが、意外にないらしい。

町を守る

かつては阿寒の建設業者も冬場は幹部も含めて道外就労に出ていた。そうするとたとえば町のタバコ屋さんの売り上げも落ちる。都会ではさまざまな産業があるが、地方において建設業は基幹産業となっており、多くの人を雇用し、重機・車両等を保有し、災害の発生時や各種イベントに対し物心両面にわたり貢献している。

菊池代表は「町外から来た人にたとえば家を建てれば補助をするとか、そういうことも大切だけれど、企業が疲弊して廃業した場合



ダチョウの幼鳥

には出て行く人も多くなってしまいます。そのことのほうが心配なんですよね。来ていただくのはありがたいけれど、出る人が多くなったのでは町の形態をなさない。各産業団体が縄張り根性をなくし、地域単位で考え、地域振興と雇用の確保のため協力して行かなければならないと思います」と、町全体での視点で見る重要性を語る。

5年前、経営が立ちゆかなくなった札幌に本社がある木材会社が解散・廃業し、町内の工場が閉鎖になった。生産していた製材の質は高い評価を得ており、地元のすぐれた木材産業の消滅を惜しむ声が高かった。このとき建設協会会員3社と地元有力者が共同で「阿寒産業開発(株)」を設立し、製材工場社員の半数以上を継続雇用した。オーストリッチ研究会以前に建設協会として既に異業種への参入をはじめていた。

昭和45年に雄別炭坑が閉山され多くの炭坑離職者が出た際や、離農者や林業関係者が廃業した際など、いつも建設業が町の経済の中心にあって、受け入れ体制を担い、結果的に町を守ってきた。

今、こんどは建設業が誰かに面倒を見て欲しいくらいの状況だが、頼れる相手はもう見あたらない。しかし、自ら立って業界を守ることが町を守ることとイコールであり、町を守ることが会社や業界を守ることでもある。町を守るために招いたその鳥は、空を飛ぶことはできないが、しっかりと大地に立ち、力強く駆ける足を持つ。

この足で町をもしっかりと支えてくれることを期待したい。

阿寒オーストリッチ研究会

<http://www.onoderagumi.co.jp/ostrich/>

